Education Systems Center for Research and Development
CRDES
Nara Women's University

# 奈良女子大学 教育システム研究開発センター

Newsletter 02

## 附属中等教育学校の教育方針・研究政策と教育システム研究開発センター

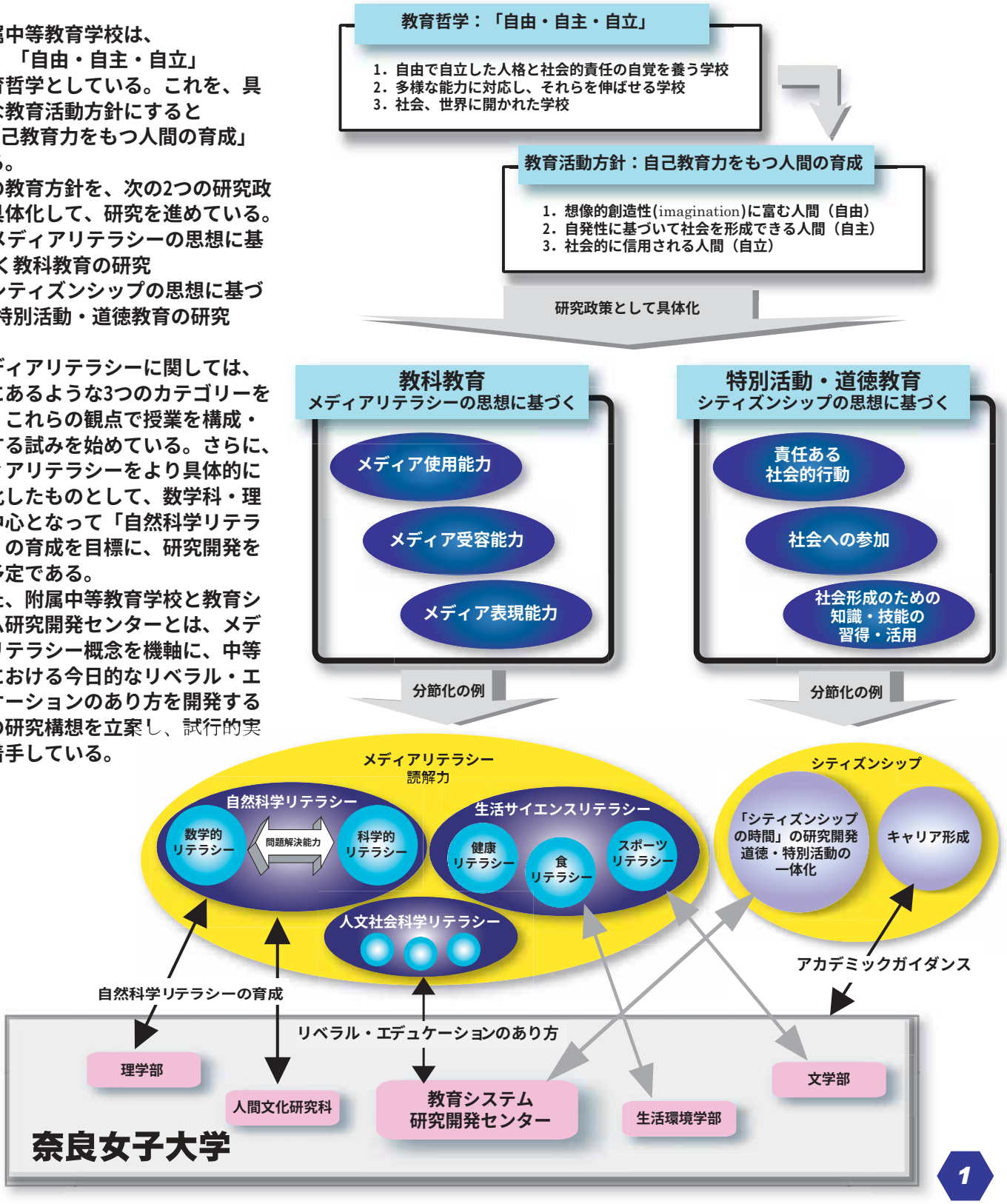
附属中等教育学校は、
「自由・自主・自立」
を教育哲学としている。これを、具体的な教育活動方針にすると
「自己教育力をもつ人間の育成」
となる。

この教育方針を、次の2つの研究政策に具体化して、研究を進めている。

1. メディアリテラシーの思想に基づく教科教育の研究
2. シティズンシップの思想に基づく特別活動・道徳教育の研究

メディアリテラシーに関しては、右図にあるような3つのカテゴリーを考え、これらの観点で授業を構成・観察する試みを始めている。さらに、メディアリテラシーをより具体的に分節化したものとして、数学科・理科が中心となって「自然科学リテラシー」の育成を目標に、研究開発を行う予定である。

また、附属中等教育学校と教育システム研究開発センターとは、メディアリテラシー概念を機軸に、中等教育における今日的なリベラル・エデュケーションのあり方を開発するための研究構想を立案し、試行的実践に着手している。



# 奈良女子大学附属幼稚園・附属小学校　共同学習研究発表会

附属幼稚園と附属小学校は、共同で学習研究発表会を開催した。

期日：2005年2月17日(木)、18日(金)
主題：「遊びの中で子どもが学ぶこと・育つことを考える～ひとりひとりの育ちの確かめと小学校へ連続する学びを考える～」（幼稚園）
「学習力を育てる学校～学びの基礎・基本～」（小学校）
内容：公開保育・学習、公開学習協議会、分科会（Ａ－Ｅ）、パネルディスカッション（「学びの基礎・基本をどう考えるか」中谷内、前田、柿元、椙田、日和佐）

両日併せて1030名（受付数）が集まり、熱心に研究協議を行った。分科会記録を以下に報告する。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

### 分科会A（３歳児・４歳児）

森本、角田、竹内、柿元、松田、福西
「３歳期、４歳期で大切にしたい学びと育ち」
年齢から見る学びや育ちと個人から見る学びや育ちとの両方から迫り、3歳期、4歳期で大切にしたい学びや育ちについて考えた。
一人ひとりの成長を記録する個人ファイル試案を作成し、1年間の子どもの成長を確かめる方法を提案した。子どもの成長を捉える視点・適切な表記方法などについて意見交流ができた。

### 分科会B（５歳児・１年）

椙田・金津・飯島・辻岡
「幼小をつなぐ＜育ちと学びの確かめ合い＞」
私たちは、評価観の共通点と相違点を掘り下げるために、相互に学習と保育を参観し合った。そこで何を体験したかをＡ４用紙１枚に記述しカンファレンスを持つ手法をとった。
その結果、「子どもの育ちの確かめ合い」と「子どもの学びの確かめ合い」という二つの柱を見出すことができた。カンファレンスを実演し、会場から「カンファレンスに参加して何を体験したか」を語っていただいた。

### 分科会C（２年・３年）

小幡・堀本・都留・野崎
「子どもがかかわる、学習が生まれる」
子どもたちの感性や行動の積極的かかわりが、子どもが創る学習、子どもが創る生活を支えていることを提案した。
２・３年生の子どものかかわりについて、「学習を支える子どものなかよし」「しごと、気になる木のはっぱをふやそう」「けいこ（音楽）ハンドベル合奏」「自然環境や社会環境と対話する子ども」などの事例を挙げながら話した。

### 分科会D（４年・５年）

廣岡・阪本・岩井・太田・矢田
「子どもと創る豊かな学び」
「豊かな学び」を「学び合う喜び」「多様で具体的な学習活動」「個性が生きる学び」「行事を通して育てる」「生活の中から問題を見つける」という角度から提案した。
豊かな学びを創るためには、「方法論ではなく子どもが楽しさを感じながら学習する。」「めあてを持たせることも有効。」「教師が教えてやろうというのではない。」などの意見を交流した。

### 分科会E（６年・専科）

日和佐・谷岡・嶋守・杉澤・植村
「小学校の出口で身につけておきたい確かな力」
独自学習・おたずね・めあてとふりかえり・コミュニケーションの観点から、小学校で培われていく自律的な学習を進める力について提案した。
例えば、「おたずね」は教室に持ち込んだものを紹介し合うなどして１年から始まり、自律的学習を進める１つの型（発表→おたずね→答え）を形成していく。そして、６年間で物事の本質に迫る鋭いおたずねができる子どもに育っていくのである。

# 第4回　全国中高一貫教育研究大会（奈良女子大学附属中等教育学校）

2005年2月25日(金)、26日(土)に附属中等教育学校で「第4回全国中高一貫教育研究大会」が開催され、550名の参加者があった。

■2/25日(金)

13：00〜13：20　全体会
13：30〜14：20　公開授業
14：30〜16：45　研究協議・講演・ワークショップ
17：00〜18：00　全国中高一貫教育研究会総会

■2/26日(土)

9：30〜11：15　分科会
11：30〜12：45　全体講演
13：45〜16：00　公開シンポジウム

■公開授業・研究協議等

国語科・社会科・数学科・理科・英語科・創作科・情報科が授業を公開し、研究協議では熱心な討議が交わされた。

また、ワークショップや講演会の参加者からは、有意義な時間を過ごせたと高い評価を得た。

■分科会

5つの分科会「中高一貫の教育課程」「中高一貫の探究活動」「学校マネジメント」「中高一貫教育校の創設と課題」「連携型中高一貫校の実践と課題」において、発表者の問題提起に基づいて活発な議論が交わされ、中高一貫教育の更なる前進に向けて、大きな力となった。

■全体講演

水野　晴央　氏(文部科学省初等中等教育局　初等中等教育企画課教育制度改革室　室長補佐)による「中高一貫教育の現状と課題」と題する講演が行われた。ホールに入りきらなかった方に対しては、講演の様子をテレビ会議システムによって中継した。

■公開シンポジウム

「生徒のことばから見えてくること
　　－転換期における中等教育をめぐる対話－」

教育を語る言葉が少なくなっている。その代わりに「心の闇」「癒し」といった漠然とした雰囲気を表す言葉が闊歩している。それは教育を捉える力の衰えであろう。あるいは、複雑であいまいな教育問題を理解しようという意志の欠如の表れではないだろうか。そのことにどのように取り組めばいいのだろうか。

シンポジウムでは、コーディネーターに西村拓生氏（奈良女子大学助教授）、コメンテーターに春日井敏之氏（立命館大学教授）を迎え、附属中等教育学校の3人の教員が、授業（鮫島京一教諭）、生徒会活動（吉田隆教諭）、保健室（羽田好江養護教諭）というそれぞれの場で発見した生徒の「ことば（言語化されない感情表現を含む）」にもとづいて問題提起を行い、参加者の力も借りながら、中等教育が抱えている問題について対話を行った。「ことばの力」「感情表現の重要さ」「生徒に寄り添う指導」などが論点となり、教育実践を再構築する上での一つの方向が「生徒に学びなおす」ことにあるということが確認された。

この企画は、中等教育学校の研究政策である「メディアリテラシー」「シティズンシップ」プロジェクトが主体であったとはいえ、教育システム研究開発センターとの研究プロジェクト「メディアリテラシーの思想に基づくリベラル・エデュケーションの再構築」（担当者：鮫島、吉田、西村）との共同作業でもあった。

メディアリテラシーという観点でいえば、メディアとしての教員が、生徒の「ことば」をいかに把握し、自らの教育実践を再構成していくのかというスキルに目を向けたものであり、シティズンシップという観点でいえば、生徒の「ことば」を手がかりに、21世紀市民社会の担い手である生徒の現状と課題に接近するということである。「学力（教員のそれも含まれる）」としてのメディアリテラシー、「社会―教育哲学」としてのシティズンシップという二つの視点から、リベラル・エデュエーションを構想するということである。

250名を越す参加者があったことだけでなく、シンポジウムへの積極的かつ好意的評価・継続開催の要望が、アンケートなどを通じて数多く寄せられた。処方箋を求めるのではなく、それぞれの現場で直面していると思われる問題について対話する場をつくること－「問いの共同体」という問題構成が、公開を旨とする研究会・シンポジウム企画の柱となるといえよう。課題としては、対話の時間の確保、外部からの問題提起者を組み込むことであろう。

## メディアリテラシー講演会

奈良女子大学教育システム研究開発センターは、本学附属中等教育学校との共催で、「学校教育とメディアリテラシー」と題して、講演会を行いました。

［日時］2004年10月22日(金) 15:20〜17：30
［場所］附属中等教育学校　多目的ホール
［講師］水越 伸 氏(東京大学大学院情報学環助教授)
［講演要旨］

日本のメディア環境の変化、「メディア・ビオトープ」という発想、批判的かつ実践的な「知」としてのメディアリテラシー、メディア研究・メディア教育研究の現状への批判などを論点とする講演と質疑応答であった。論点を５つに絞ってまとめれば以下のようになる。

① 日本のメディア状況を森にたとえるならば、テレビのキー局や新聞社に代表される巨大メディアが巨木のように存在し、下草も生えない状況であったが、今日、携帯電話などの私的メディアが急速に普及し、メディア環境が大きく変化してきている。こうした中で、新しいメディア生態系が生まれつつある。両メディアの中間に位置する場、すなわち私たちが日常生活の中でメディアと関わっている領域がそれである。「メディア・ビオトープ」という暗喩はこの中間的領域を指す。

② 「メディア・ビオトープ」における活動を通じて、自らのメディア生態系を改善したり、うまくネットワーク化することによって、メディア環境そのものの在り方に影響を与えていくことができるではないか。このような取り組みを展開するにあたって基礎となる「知」の一つがメディアリテラシーである。

③ メディアリテラシーを特定の領域としてとらえたりすること、たとえば学校教育の枠組みに押し込めたり、アカデミックな領域としてのみとらえてしまうことについては批判的である。私たちのメディア生態系を問題にすることは、巨大メディア批判にとどまることなく、実際に自分で表現すること、表現を通じて社会と関わっていくという実践的問題でもある。その意味で、21世紀のシティズンシップのあり方と密接に関わる問題である。

④ 「メディア・ビオトープ」という発想で学校教育を見た場合、学校内部にあるメディアの生態系の問題、「学ぶ」という営みのあり方の問題に留まらず、学校がおかれている地域社会におけるメディアの生態系の問題までが射程範囲となる。メディアリテラシーは、このような広範な領域を視野に入れた実践の基礎的な「知」であるし、さまざまな実践をつなぐキーワードになりうると考える。

⑤ メディアリテラシーは多義的な言葉である。そこが強みでもあり弱みでもある。しかしながら、メディアの生態系をデザインしなおすための「知」をどのように形成するかという問題構成という点では一致しうると考えられる。メディアリテラシーについての附属中等教育学校の捉え方およびそれに基づく研究政策は、世界的な研究動向からみても先駆的研究であり、大きな可能性を秘めている。今後も、いろんな形で協力できればと考えている。

メディアの現状・研究状況への悲観的な状況把握をしつつも、現状を変えていく要素を見逃さずに積極的に関与する態度に貫かれた水越氏の講演は、多くの知的刺激を与えただけでなく、「メディア・ビオトープ」という発想の豊かさ・楽しさを物語っていた。また、近隣の研究者・研究プロジェクトを紹介していただいたことも付言しておく。

(文責　鮫島)

## フォーラム企画「女子大学の教育力(1)」

本センターは、文学部研究プロジェクト「学部教育における学びの転換と展開」グループが主催する大学教育フォーラム「女子大学の教育力(1)：「大学で学ぶ」を考える」(2005年2月26日)を後援いたしました。

前半は、大塚雄作先生（京都大学高等教育研究開発推進センター教授；専門はＦＤや授業評価、大学評価など大学教育研究）に「大学文化の形成と評価」についてご講演いただきました。講演趣旨は、次の４点です。

１．大学は「ひらかれる」時代に突入した。その将来像は個性化や質の保証を行い、社会的責任を果たすべき機関として描かれる。

２．大学の自律性とアカウンタビリティの両立を目指し不断の研修が求められる。例えば授業評価は、授業改善や学習のふり返り、教員と学生のコミュニケーション・ツール、そして教員自らによる授業の表現というアカウンタビリティのツールとして機能する。

３．今後は、ＦＤからＣＤ(Community or Cultural Development)を目指し、教育を語る場としての教員のコミュニティ形成が重要になる。

４．大学の個性化に向けては、大学文化を物語ることこそ評価となる。個性の表現と、自律性と説明責任の統合の２点において自己妥当化のプロセスを辿り、ＣＤに至る。

後半は文学部１回生の大学導入教育に焦点を当て、シンポジウムが開かれました。文学部長奥村悦三先生ほか４名の話題提供を受け、１回生は学ぶ意欲と授業への期待が高く、自主的な探究活動を取り入れた授業の可能性が認識される機会となりました。

(文責　本山)

奈良女子大学教育システム研究開発センターNewsletter 02
2005年3月発行
奈良女子大学教育システム研究開発センター
〒630-8506　奈良市北魚屋西町
奈良女子大学　H棟505　TEL.0742-20-3352
Web　http://www.crades.nara-wu.ac.jp/
mail　crades@cc.nara-wu.ac.jp